渡来文化と香道

― しきたりの中の陰陽など ―

● 上　村　代志子

香が仏教と共に伝来したのは六世紀とも四世紀とも言われるが、香はサンスクリット語でgandhahと言い、乾陀・健達・乾陀羅耶と音写する。諸仏菩薩への供養の為等に用いられた香が、我が国に於いて玩香として独特な聞香へと発展し香道の創成となった訳であるが、茶道・花道等とも同様に、大陸の古代思想と仏教、禅が色濃く反映されている。今回は現在香筵等で何気なく行っている事やしきたり、或いは組香の中の伝来に関する部分について調べるが、先ずは古代の嗅覚について『風土記』等から観る事とする。

１.『風土記』と「記紀」に観る嗅覚・味覚

①『風土記』

常陸国・出雲国・播磨国・豊後国・肥前国の五ヶ国風土記は、元明朝の和銅六（713）年に中央官命に基づいて地方各国庁で筆録編述された。『古事記』の成った翌年であり、『日本書紀』が撰進された養老四年の七年前で、当時通常行われていた四字句を基本とする漢文で表されている。

この地方の文献の中に中央政権が編纂した「記紀」には見られないであろう記述「香り・匂い」に関する原風景的感覚を発見できればという思いがあったが、やはり確認できたのは僅かであった。

味に関しては甘（うま）し、酸（す）し、鹹（から）し、味（うま）しの文字があり、そして橘、李という渡来の芳香花木と果実、菊、百合、梔子、蕗等の名称も多く見られる。当然ながら生活には美味な食物と共に良い香りも数多くあったと思われるがその表現は非常に少ない。寺院では香も焚かれていた訳で、その記載がないのもこの時代の地方に住む人々や、記録したであろう役人が、香りに関心が希薄であった事が示され、華やかな都での貴族や僧侶達の香りに満ちた生活との格差が窺われる。

それに比べて色に関しては白を始め多くの名称が記されていて、古代の日本人は視覚的には豊かでも、匂いに関しては関心が薄かったと言われる根拠の一つにもなるであろう。

「香」の文字は風土記の性格上地名に多く表れ、香取・香島・伊香・佐香・伊香刀美・浅香等がある。

色名が付されているものは、白鳥・白幡・白細・白砂・白土・白珠・青垣・青葉・黄葉・黄泉・筑紫等であり、色目としては、白緑・黄金・錦・丹・紺・紅・赤・青紫・黒の文字が見受けられる。

次に味覚についての記述を抜粋する。

〇常陸国風土記、香島郡の部に

神の社の周匝は卜氏の居む所なり。（中略）春、其の村を経れば、百の艸に艶へる花あり。（中略）千の樹に錦の葉あり。（中略）生へる蓮根は、味気太だ異にして、甘きこと他所

に絶れたり。（中略）前に郡（郡役所）を置ける所にして、多く橘を蒔ゑて、其の實味し。

○肥前国風土記、基肄郡の部に

酒殿の泉（中略）此の泉は、季秋九月の始めに、白き色に變わり、味は酸く、気（か）は臭くして、喫飲むこと能はず。孟春正月に反りて清く冷く、人始めて飲喫む。

○肥前国風土記、高来郡の部に

池（土齒の池）の裏は（中略）荷・菱、多に生ふ。秋七八月に荷の根甚甘し。季秋九月には、香と味と、共に變りて、用ゐるべからず。

②『古事記』

『古事記』は712年に編纂された。序文と本文は漢文、歌謡は仮名で表記され、序文には次のように記されている。

夫れ、混元既に凝りて、気象未だ效れず。名も無く爲も無し。誰れか其の形を知らむ。然れども、乾坤初めて分れて、参神造化の首と作り、陰陽斯に開けて、二霊群品の祖と爲りき。

二気の正しきに乗り、五行の序を齊へ、神理を設けて俗を奬め、英風を敷きて國を弘めたまひき。

文字として「道」「徳」「六合」「八荒」等が見られる。又、下記の様に果実に就いての物語もある。

垂仁天皇が多遲摩毛理（たじまもり）を常世の国に遣わして登岐士玖能迦玖能木實（ときじくのかくのこのみ）を採ってくるように命じた。多遲摩毛理は苦難の末、漸く常世の国（不老不死の理想郷）より、その実を採って持ち帰ったが、既に天皇は崩御していた。多遲摩毛理はその実を捧げ、「常世の国の登岐士玖能迦玖能木實を持ちて参上りて侍ふ。」と申して、遂に叫び哭いて死んだ。その登岐士玖能迦玖能木實は今の橘なりと記されている。

この芳香の花木で美味な実を付ける「橘」は歌謡にも登場する。

いざ子ども　野蒜摘みに　蒜摘みに　我が行く道の　香ぐはし　花橘は
上枝は　鳥居枯らし　下枝は　人取り枯らし　三つ栗の　中つ枝の　ほつもり
赤ら嬢子を　いざささば　良らしな

数字としては「五」と「八」が目立つ。

「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」

スサノヲノ命の歌とされ「八」の数を偏愛するとされる古代人が浮かぶ。八俣の大蛇の物語の部分には、八稚女、谿八谷峡八尾、八つの門、八つの桟敷、八塩折の酒等あるが、実際の八とは限らず、これらは具体的な物の数の多さを表し、古代人の一種の憧憬として見る事も出来る。

ここで一般的な数字の観念に就いて述べると、日本人は１は勿論の事２を尊重し一対とか一揃いを好む。８も重んじられ、「八」字から末広がりと考える。又、８は２×２×２でもあり、基本数の中では２を最も多く含む数であり、２を尊重する事にも通じ、神話にも多く登場する。

日本神話には３と５も多く使われるが、「二十五・・」等、５とその倍数が多く使われる神話もある。６も特別な数と言われている。

中国では陽数とされる３・５・７・９の奇数を、高句麗・百済は５を、新羅は６を重んじたとされるが、これらの数の概念は様々に日本に影響を与えた。日本に於ける４の数字は「死」にも通じる事で嫌われるが、４が最大数であった時代が有ったとも考えられている。

因みに4はアメリカインディアンでは聖数となっている。聖数とは数がそれ以上数えられなかったとされる古代、究極の数として神秘化され神聖化された数という事である。そして、その数は後世、単に愛好、愛用される数となった。

③『日本書紀』

『日本書紀』は720年に編纂され、潤色を施した漢文で表記されている。

「天」「地」「陰陽」「陽神」「陰神」「乾坤」「空」「六合」「六世」「五情」等の文字も目立ち、中国古代思想を示す文字が『古事記』に比べより多く見られ、仏教伝来で香木の記載も散見される。

○欽明天皇十三（552）年冬十月、「百済の聖明王が仏像や経論等を奉った。」

○欽明天皇十四（553）年夏五月、「河内国泉郡の茅渟海で雷の様な震響と光り輝く樟木を見つけ献上した。」

○推古天皇三（595）年夏四月、「淡路島に漂着した流木を薪として燃やした所、遠くまで薫り驚いて献じた。」

○皇極天皇元年（642）年秋七月、「大寺南庭に仏菩薩四天王の像を飾り、衆僧を招じて、大雲経等を読ませられ、蘇我大臣、手に香爐を執り、香を焼かせて発願遊ばされた。この時微雨降る。」

香を焼いた目的は雨乞いの為であろう。我が国で香を香爐で焼いた事を示す最古の記録と言われる。

○天智天皇十（671）年冬十月、「勅使を法興寺に遣わされて、袈裟、金鉢、象牙、沈水香、梅檀香などの珍財を仏へ供えられた。」

○同年十一月、「大友皇子は五人の大臣を随え、王子自ら手に香炉を執らせられた。五人の大臣も香炉を捧げて、次々に起ち（中略）若し詔に違う事あれば四天王に打たれ、天神地祇の・・・」

この様に供香や、或いは天神地祇への誓い、又、儀式にも香が焚かれる事が記されている。

正月元旦寅の刻に天地四方山陵を拝して、年災を払う四方拝には清涼殿の東階の外に屏風を立てその中に御座三か所を設け、その前に白木の机を置いて、香、花、燈などを供え拝む儀式も行われるようになった。

香薬としても珍重された沈香・白檀・丁子・龍脳・鬱金の五種を五香というが、供香に用いた。香は「コリ」と訓まれているが、その語源は香が凝り固まった物であるという事によるものであろうとされている。

悪臭については「血の臭きに堪へず」「飼部等の気を悪む」等有り、同様に『古事記』にも、イルカを捕獲する時、鼻の血が臭かったので、そこを血浦と名付けた。と記されている。

この時代の一般庶民は水田で米を作って簡素な生活をしていたが、都では律令国家の下、美しい衣装に身を包んだ貴族たちは儒教礼賛の次元の異なる空間で華やかな生活を送っていたに違いない。「醸める酒、美にを　飲喫ふるかわ」とも有り、記紀とも、酒に関する記載が多く、『風土記』の宴といい、古代の人々の酒に酔いしれた楽しさが偲ばれる。

「橘」は実を香菓と記され中国渡来のカンキツを指す。万葉集にも多く詠まれ、記載が記紀ともに有り、書記には「桃」の記述もある。桃はやはり中国から渡来し、邪気を払うとされた。

陰陽寮の記載もあるが、天文・気象・暦・時刻・卜占などを取り扱う機関であり、陰陽師が所属していた。当時、暦は天皇から下賜されたもので統治者の権威を表すシンボルの一つであった。

外薬寮は侍医を中心に構成され、天皇の診察、服薬に就いてあたる内薬司に対するものであるとされるが、典薬寮に相当し「延喜式」を見ると、当時薬物として扱われていた香木や薫物の材料である香料の名が多く記されている。

2、香道の根本「聞香」

海外から渡来した文化、思想、仏教、禅は国家形成の基礎に次第に組み込まれて行き、同時に日本固有の文化にも同化されてきた。香はその「はたらき」故に、仏の使いと言い、六波羅蜜をはじめ修業の徳に譬え、又、三乗諸天の徳に附して語られ、伽羅・沈水・栴檀・塗香・抹香・焼香・根香・枝香・華香等々、名称は無数挙げられる。その香がやがて宗教性から脱却し、玩香としての道を歩み、薫物文化を形成した平安貴族の時代を経て、自然の一木の香りを重用する武士の時代になり、「聞香」へと形を変えて行った。

一炷聞・炷継香・組香と形式は異なっても全て「聞香」がその根本となっている。

心静かに香気に向う。掌に乗った聞香炉から醸し出される芳香に集中してゆく、一息、二息、三息・・・　香りとの呼吸が全てである。まさに空の世界にもなる時となる。

用いる聞香炉は、しきたり通りに整えられ、短い時を香りと共に、聞く者を迎える。

五感で味わう聞香は、嗅覚・味覚・触覚（炭団の温もり）・視覚、そして無音の声を聞く聴覚となる。

次に経典に説かれる「聞香」を引用する。

香における「かぐ」という行為に対しては「聞香」と言うを専らとし、「嗅」字の用いられることは殆ど無いと言ってよい。梵語から翻訳された仏教諸経典をはじめとして、古典としての漢文詩賦にあっても、此の二字を以て語り詠じている。「聞香」のもつ声韻から推しても、先人の香に対する姿勢をうかがい知ることが出来る。

鳩摩羅什訳『法華経』法師功徳品第十九

○如是等天香　和合所出之香　無不聞知

是の如き等の天香、和合して出す所の香、聞き知らざること無けん。

○雖聞此香　然於鼻根　不壊不錯

此の香を聞くと雖も、然も鼻根に於いて壊らず錯まらず。

東普・仏馱跋陀羅訳『大方広仏華厳経』巻第五十・入法界品第三十四之七

〔蓮華黒沈水香〕

○若有衆生　得聞此香　離一切悪　具清浄戒

若し衆生有りて此の香を聞くを得ば、一切の悪を離れ清浄の戒を具せん。

（『香と仏教』）

聞き方に就いても文献に次のようにあるが、実際には自由に聞いて良いとされている。

鼻の心持ちの事、右重左半の事。一説には「右にてニ息或は四息聞、左にて一息又は三息聞事」ともいへり。しかれども、時刻により左右の鼻孔の通ずる方あり。聞時、十二時の時をはかり、通ずる方にて聞ば、香もよく聞へんか。

鼻中の気は陽時は左、陰時は右にあり、亥・子の刻は両鼻とも通じる。

3、陰陽五行のしきたり

『古事記』序文に「陰陽乾坤」の文字が記されているが、中国の古代思想である陰陽説は陽と陰の二気で世界が構成されているという考え方で、互いに影響、循環し合って存在すると考える。陽は天・火・男・暑・明・太陽・左・上・高・朝・吉等であり、陰は全くその反対となり、例えば天なら地、火なら水などとなる。

五行説は全ての事象を木・火・土・金・水の五つの原理によって説明する。例えば五官は目・

舌・唇（口）・鼻・耳。五色なら青・赤・黄・白・黒である。五気は相互に作用し、相生と相剋の関係がある。

この陰陽五行は、香道だけでなく他の伝統文化にも様々な影響を与え現在まで継承されている。

香道具の一つに内敷があるが、表裏が金と銀に分けられ、金は陽、銀は陰を意味する。

①宇宙を表す聞香炉

聞香炉は丸、四方、六角、八角香炉があり、足は蝶足（四足）、三足、無足があるとされ、何れも陰陽五行説や易の影響があるが、現在は丸の三足香炉が一般的で香筵では一対を用いる。

丸の聞香炉を上から見ると、円形の陽、そして中央に置かれた銀葉は方形で陰であり、山形に整えられた灰にも陰陽の二気がある。

香炉に仕込まれた香木・炭団・灰・銀葉は五行の木・火・土・金であり、残る水は香炉であると考える。香木は沈、沈水、沈水香とも言われるがこれも水に因み、掌に乗った聞香炉はまさに陰陽五行の小宇宙を表している。

香炉の数え方には隻を用いるが、船も同様であり、水を意識しての事であろう。染付の図柄にも山水や水の文様が多い事にも意味がある。

この隻の文字は雙に対して、一対をなすものの片一方を意味する。

灰づくりや灰手前は香炉の灰に火箸で箸目と言われる筋が付けられるが、これにも陰陽五行が決められている。真行草の区別があり、山形に整えた灰の表面を五つに分ける。五合、五葉と言う。流派により異なるが、一流派では一つの合（葉）に九、十一、十三本と奇数の箸目を付け、最後に聞口を付けるので、全体では陰の数の箸目となる。他流派では五合十筋と言い、五つに分けた一つの合は十の箸目を付けて全体では六十本の箸目となる。双方陰陽二気となる。

> 香炉口に一空を備へ、三ッの足は日月星の三光、天地人の三ッとして本朝の神秘とし玉ふ。
> さるによつて香を炷家は天神地祇の守り給ひ、悪魔の障碍をはなれ、其日のさちを設く。
> 香炉を富士にかたどり八葉の岑八ッの谷七ッの位を定められ、灰は五色の雲に准へ五ッの色をなす。
> 青き灰は春の山辺の若草のかうばしきにたとへ、赤きは夏の明けがたのあかねさす風情、薫風南より来れりと也。白きは秋の千草のいろいろに、その花におけばその色を見するしら露の、白菊に置るありさま、黒きは誰まことよりしぐるる空の雲のけしき、黄なるは中央を表す。さりが中にも白き灰はときしらぬ富士の雪、あるはまたしら雲のかかる姿なるによって第一白きをいつくしむ。（『香道蘭之園』）

②香木の陰陽と五色

香木は六国五味と言われ、五行説に通じる五味は、酸・苦・甘・辛・鹹、そして無となっている。又、六国は次の様に陰陽に分けられ、炷合の組香の際、組み方に利用される。

> 香に陰陽あり。陰より陽にかへる。陽より陰にはかへらず。香の陰陽といふは、
> 伽羅　羅国　寸聞陀羅　　陽の香也。
> 真那盤　真那伽　佐曾良　　陰の香也。　（『香道蘭之園』）

香には青・黄・赤・白・黒の五色が有るとされ、「松根ハ青シ、羅国ハ黄ナリ、伽羅ハ黒シ、マナ蛮ハ赤シ、シヤセツ（邪絶）ハ白シ」とある。松根は寸聞多羅、邪絶は佐曾羅の事であろう。

③組香の陰陽五行

組香は江戸時代に数多く創作されたが、淘汰され現在まで伝承されているのはおよそ300組と言われ、組香名は和歌、物語、故実、季節に因んだ名が多い。組香名に付されたり構成する数を見ると、「三」の陽数が圧倒的に多いが、偶数である陰の数字も多く見受けられる。

次に数字が付された組香名を挙げる。

一陽香　一二三香　一首十体香
三徳香　三才香　三道香　三教香　三戒香　三星香　三光香　三体香　三景香　三種香
三夕香　三鳥香　三友香　三炷香　三文字香　三乎一香　三島香　三壺香　三千年香
三種加客香
五行香　五方香　五常香　五音香　五色香　替五色香
七夕香　七種香
重九香
二見香　二炷開花月香
四季香　四節香　四炷香　四町香　四季歌合香　四季恋題合香　四季寝覚香　源氏四節香
源氏四町香　異四季香
六儀香　六国香　六歌仙香　六玉川香
八卦香　八音香　八景香
十炷香　蓬莱十炷香　無試十炷香　炷合十炷香　十疋立競馬香　十種香　拾玉香
十二支香
五十炷香　百炷香　千年香　千歳香　源氏千種香
数字の他に大陸の古代思想に関する内容の組香　　陰陽香　法華香　仙家香

次に組香の中で陰陽五行が色濃いものを取り上げる。

「五常香」

仁、義、礼、智、信の五つの香を一組として、五組用意される。試香は無い。まず一組を打交ぜ、順不同で炷き、その時の出を仁義礼智信の順に当てる。その後、残りの四組の各組の出を一回目の五常にあてはめて同じ香りと思われる文字で答える。

下附は、一組あたれば一徳、二組は二柄、三組は三綱、四組は四行、皆あたれば五常となる。

「三道香」

儒、仏、神の三種の香りが用意され、儒、仏は試香があり、儒仏神が各三包計九包が本香で炷かれる。儒が皆あたれば仁義礼智信、仏が皆あたれば大悟本来、神が皆あたれば唯一宗源、皆あたれば成道、皆はずれは老荘、その他は雑行と下附に評価する。

「六儀香」

盤物と云われる組香で、小さな建物（作り物）が登場。風、賦、比、興、雅、頌の香りが用意され、連衆（客）は住吉方と玉津嶋方に分かれ団体戦となる。住吉方は松の建物五本、玉津嶋方は榊の建物五本を用いて盤上を進む。

「陰陽香」

陽の香一と三、陰の香二と四、各二包計八包用意し、陽と陰の香各一包、計二包を組み炷く。陰の香がはじめに出れば妹背、陽がはじめに出れば夫婦と答える

「八卦香」

元（一）、亨（二）、利（三）、貞（四）の香が用意され、元、亨、利には試香がある。四種

の香各一包を打交ぜ、一包を抜いて残り三包を炷く。易法通り三木の数を出香の奇偶数で捉える。本香のはじめに出た三木は最下とし、上へ二炉目、三炉目の出を重ねて描いて行く。元と利は奇数、亨と貞は偶数扱いとし連「—」と断「－－」で表現する。そして、易卦に準じて乾、坤、震、艮、離、坎、兌、巽から相当する八卦で答える。皆あたれば元亨利貞、二つあたれば両儀、一つあたれば太儀と下附けに評価する。

「法華香」

仏、妙、法、蓮、華の香りが用意される。仏のみ試香が有り、仏を二包、他を各三包計十四包を二組炷く。「法華二十八品は、初め十四品を迹門とし、方便を説く、これ権である。後十四品を本門とし、微妙眞實を説く。初め十四品は小乗、後十四品は大乗妙典とする。釋尊四十餘年の説法は、皆小乗方便を以て、傳来の教にして能令入道法、その後八年は、眞實微妙大乗妙典を説く。本組香はこの趣に因で、初め十四包を無試にして、空より生ずる所方便迹門とし、後試して正聞にするは、體を生じて眞實、即ち大乗妙典の意である。(『香道』)」

「一陽香」

一陽とは「一陽来復」つまり「一陽節」に由来している。「一陽来復」とは陰の気が極に達したのち、陽の気が初めて生じることを云う。このことから冬が去り、春が来る意義にも用いられ、転じて新年の意義や事物回復をも意味する。(『香道の作法と組香』)

この組香の特徴は、十炷香形式をとっていながら、一の香だけに試みがあること。

香は一、二、三、ウが用意され、本香は一、二、三が各三包、ウが一包計十包であり、一を間違えるのを恥とし、聞き外したらその違えた答えを〇で囲む。

4、左右のしきたり

雛人形の飾り方を見ると、現在は男雛は向って左、女雛は右となっているが、これは西洋風になったもので昔は逆であった。

陰陽では陽は左、陰は右の位置となり、向って見ればその逆、右の方が陽となる。これは昔、天子は北を背に南に向かって座すので、太陽が昇る東が陽となり、太陽が沈む西は陰となった処から由来する。中国では時代によって左右の上位が変わったと言われるが、日本は唐の文化を取り入れた為、左上位となった。「天左旋地右動」の考え方も左優位である。平安京の紫宸殿では天皇を中央に、向って右東方に左大臣、左西方に右大臣が座した。位としては左大臣が上である。紫宸殿の南庭に植えられた左近の桜、右近の橘も同様である。

神社で神官が修祓を行う時、幣束を神官は左右左と振るが、これも左上位の表れである。

香筵では、正客が香元の右手か或いは左手に座すかは流儀によって異なるが、客を主体に考えれば香元から見て右手が上位となり、その場合、客は左が上座となる。三息で聞いて次客に回すが、左の鼻から先に聞く方が良いと言われる時代が有った。香炉の正面で聞いて次客には裏正面で回す。裏正面で回された香炉を自分の方に正面を向ける時、時計と反対回りにする。裏正面にする時は逆に時計回り、つまり正面は常に左の上座に向ける事になる。

他流儀の場合、香元の左手が正客になり、客は右が上座になる訳で、香炉は正面で回し、裏正面で聞く、やはり三息だが、香炉の廻し方は逆となる。そして右の鼻から先に聞くと言われる事もある。

重硯の扱い方も上から取るのか下から取るのか違いがある。流儀によって何故このように様々に反対なのかは明確ではないが、それぞれ合理性が認められる。香道の根幹は一つである。

現在はあまり行われていないが、香木の香りを衣服等に付ける留香は男女によって異なり、男性は左の袖より入れ右へ出し、女性はその逆となる。

香包は祝儀袋と同様で裏への折り返しは下が上になり受ける形となる。又、折りたたんである物は全て右側が和になり、打合せは左側となる。古文書は右とじであるのと同様である。

着物は左衽が上前となり、右利きの人に適している。漢字文化がそうであるように伝統的に和の文化も右利きに適している。左利きは世界的に人口の約10%と言われている。

5、伝統文化はコミュニケーションの泉

記紀を通観すると国造りや神々の事物の奥に、当時の人々の生活が垣間見え、書記では漸次国家が形成されて海外との交流も進み、華やかな雰囲気さえも感じられた。「橘」という中国渡来の芳しい花木に就いて数多く記され、並行して渡来する思想も文化も次第に色濃くなり、関連する記述が増加し、伝来の異文化が我が国の香りの文化や香道にも大きな影響を及ぼして行く過程が目に見える様であった。

今回は取り上げなかったが『香道軌範』には更に細かく軌範が記されている。

「橘」や「梅」等の植物と、寺院で焚かれた「香」に、日本人が元来持っていた感覚が呼び覚まされ、未知の香りを受け留め発展させたその背景には、日本の美しい四季があり、風土があった事に他ならない。その自然に育まれた人々の細やかな精神、感覚があったからこそである。

中央から地方へ伝播して行った香りの文化は、その過程に於いて様々に影響され、今日に至っている。「香り」だけでなく伝統というものは全て同様であり、先人から代々受け継いできたコミュニケーションそのものである。

「香」に向う時、それは時間を超越し、空間をも超越する。この思い、この感覚こそが何百年、いやもっと長い年月をかけて磨かれてきた伝統である。

しかし、伝統は守るだけではなく、社会の変化、発展と共に進化しなければならない。

【参考文献】

・秋本吉郎（校注）日本古典文学大系２『風土記』（岩波書店1986）
・倉野憲司、武田祐吉（校注）日本古典文学大系１『古事記　祝詞』（岩波書店1985）
・坂本太郎　他（校注）日本古典文学大系67『日本書紀　上』（岩波書店1986）
・坂本太郎　他（校注）日本古典文学大系68『日本書紀　下』（岩波書店1970）
・黒板勝美　他（編輯）『国史大系』第二十六巻（吉川弘文館1965）
・虎尾俊哉　著『延喜式』（吉川弘文館1964）
・山中裕　著『平安朝の年中行事』（塙書房1972）
・有賀要延　著『香と仏教』（図書刊行会1990）
・尾崎左永子（校注）『香道蘭之園』（淡交社2002）
・蜂谷宗由（監修）長ゆき（編集）『香道の作法と組香』（雄山閣出版1978）
・杉本文太郎　著『香道』（昭文堂書房1929）
・神保博行　著『香道の歴史事典』（柏書房2003）